

tope SPECT を行い CAG 所見と比較した。このうち冠状動脈内血栓溶解療法 (PTCR) を行った 18 例のうち再疎通の見られたのは 11 例であり、10 例には SPECT にて Tl と Tc-PYP の overlap があった。しかし、再疎通の見られなかった 7 例では 2 例にのみ overlap があり、2 群間には有意な差がみられた。さらに PTCR 未施行 17 例を合わせた 35 例について検討したが、再疎通群と非再疎通群の間には集積様式に有意な差があった。dual isotope SPECT が部位診断のみならず、再疎通の有無さらには心筋救出効果の評価に有用であると考えられた。

8. 核医学検査が有用であった大腸血管腫の 1 例

小俣 香	大石 卓爾	斎藤 了一	
隈崎 達夫	山岸 嘉彦	恵畑 欣一	
		(日本医大・放)	
古川 清憲	田中 宣威	(同・一外)	
奥山 厚		(栃木がんセ)	

症例は 22 歳男性。16 歳時外痔核術後無痛性排便時下血出現。腹部単純写真、X 線 CT、上下部消化管造影で異常認めず。下腸間膜動脈造影にて静脈相で直腸部に淡い貯留。大腸内視鏡で肛門輪から 25 cm 口側にわたり全周性暗褐色の粘膜下腫瘍。^{99m}Tc-RBC シンチ (体外標識法) では delayed static image にて直腸部位に徐々に増強する強い濃染像を認めた。以上より直腸血管腫と診断、低位前方直腸切断術施行。病理所見はびまん性海綿状血管腫であった。術後下血は消失、^{99m}Tc-RBC にて濃染像は消失した。本邦にて大腸血管腫は 17 例目だが核医学検査を用いたのは本例が初めてと思われる。本疾患の特徴を考慮すれば、全身検索を含めた診断および経過観察に ^{99m}Tc-RBC シンチは有用であると思われた。

9. 脾過誤腫のコロイドシンチグラム所見

——hot spot を示した 1 例を経験して——

岡田 淳一	吉川 京燦	叢島 聡	
内田 佳孝	服部 英行	宇野 公一	
有水 昇		(千葉大・放)	
後藤 博三	小方 信二	柏木 福和	
長谷川雄一		(成田赤十字病院)	

症例は、17 歳、男性、主訴は左季肋部痛。超音波検査、

CT 検査、血管造影で、血管新生に富む充実性脾腫瘍が認められた。^{99m}Tc フチン酸によるコロイドシンチグラムでは、腫瘍内に放射活性がみられた。脾摘出術が行われ、脾過誤腫 (赤脾髄型) の病理診断であったが、赤脾髄内の細網内皮系細胞に放射性コロイドが取り込まれたと考えられた。

脾組織成分の構成異常である脾過誤腫は、欧米文献を含めても約 100 例の報告しかない稀な疾患である。われわれの調べたところ、コロイドシンチグラムで集積の増加を認めた報告はこの症例が初めてであるが、病理像における赤脾髄の増生所見により説明できると考える。脾腫瘍における放射性コロイド集積は脾血管腫においても報告されているが、充実性脾腫瘍における診断、特に脾悪性腫瘍との鑑別診断にコロイドシンチグラムは有用である。

10. Sjögren 症候群の唾液腺シンチグラフィの検討

丸野 広大	久山 順平	石原真木子	
叢島 聡	内田 佳孝	宇野 公一	
有水 昇		(千葉大・放)	
田辺恵美子		(同・皮膚)	
佐藤 和一	加藤 英行	関口 力	
植松 貞夫		(同・放部)	

Sjögren 症候群の診断における唾液腺シンチグラフィの視覚的、半定量的評価を再検討するとともに、涙嚢描出に注目しその意義を検討した。対象は 16 症例 (口唇生検陽性 10 症例) であり、視覚的評価として、甲状腺と耳下腺集積の比較、口腔内 RI の描出、耳下腺集積曲線パターン (TAC)、半定量的評価として唾液腺 RI 摂取率、排泄率を検討した。涙嚢描出は酸負荷後の後期像で評価した。その結果視覚的評価は正常例と鑑別が困難であったが、半定量的方法では摂取率、排泄率低下傾向を認めた。涙嚢描出はシルマーテストと良く相関し、TAC より診断率が高かった。涙嚢描出の評価を含めた唾液腺シンチグラフィは Sjögren 症候群の診断に有用であると考えられた。